

円陣～エンジン～



令和元年 10月 9日

根獅子小 校内研修通信 No9

文責 松田 優子

いよいよ小陸競が目前です。1週間延びたもの子どもたちの意欲は十分です。力を発揮し、輝きを放ってくれることと思います。

さて、先日行われた中部中学校での「人権教育研究推進事業」の研究授業ですが、遅くなりましたが藤井先生のお話を中心にご報告したいと思います。

【授業に関連して】

- ・丁寧ということがすべていいのか…意欲にはつながらない。
- ・ヒントカードの出し方…一人一人の実態に合わせる必要感。
- ・教科書ではなく、子どもの実態に合わせた問題の出し方。教科書通りの指導だと、習熟問題の方が簡単にとける問題であった。
- ・誰を板書に指名するかに配慮が必要。班活動の中で、必要とさせる人を取り上げてはいけない。
- ・話し合う場面で、「なんで?なんで」「わからん」は、共感的サイン。関係性が十分にできている。
- ・自分たちで学習要求を出せるようになることが重要。こうしたい、ああしたい。考える方法や時間を子どもたちが自ら設定する→能動的に学ぶ（アクティブラーニング）

【子どもたちが能動的に学ぶには】

- ・居場所感の保証 「恐怖でなく愛を」
- ・自己決定の保証 「子どもたちが自己決定できる機会を」
- ・状況的興味の喚起…教育方法の工夫「グループで考えたい!!」
- ・状況との対話 「読見取」柔軟に調整する。
- ・価値づけ 「～な力がついたね。」「成長したね」学習経験を自己概念に価値づける。

※やはり、学級での居場所のあることは大事な学びの要素であると思います。本校では、Q-Uテストの結果を考慮しながら、まず学級の支持的風土が十分に醸成されるよう頑張っていきたいと思います。また、授業の中で状況を「読見取」ながら子どもたちの学びが深まっていくように私たちの「読見取」力・指導力を高めていくことが必要だと感じました。

【学習形態について】すべてが学び合いでなくてよい。

- ① 講義・・・子どもに知識を伝達。想像力を刺激する。
- ② 個別, 集団・・・理解と深化の場
- ③ 探求学習・・・創造性の場
 - ◎ 単元を通して子どもたちにどこまで教えて、どこから考えさせるのか判断しなければならない。
 - ◎ 子どもたちはどのように学ぶか日々研究し、子どもたちの状況を見極め、適切な選択及び判断を行う必要がある。
 - ◎ 現状からみて育成したい資質・能力を考えながら、長いスパンで子どもの学びや成長をとらえる。

【指導の中で】

- ・「わからない」「こまった」「まちがい」を大切にする。
- ・わかるということは人に説明できること。
- ・支持的風土ができてくると「〇〇ちゃん式まちがい」という言葉でも「ずれ」を確認できる。「ずれ」こそが学びの種となる。
- ・「なぜ」「どうして」を大事にする授業。教師による揺さぶり。揺さぶりの幅が信頼の幅である。
- ・めあての中に「なぜ」をいれる。

例えば4年生社会科の学習において、

長崎の港は〇〇のように使用させる。

《なぜ、長崎の港は〇〇のように使用されているのだろう。》と設定してはどうか。

※生徒が自分で獲得したものは忘れない。

《県教委石山先生より指導》

- ・人権視点項目を指導案に入れる。人権の仮設との関わりを指導案に記載する。
具体的にどんな姿を目指すのか。
- ・わからない子が、「なんで？」と言い合える支持的風土づくり。
- ・学びの意欲が続いていくような手立てをどう打つのか。→指導案の中にもそのことを記述していく。

※ 研究授業の中で、学び合いの場を設定することはやはり大切だと思いました。また、学び合いの形態が子どもたちの実態に合っているのか、授業の内容にとって効果的であるのかを考える必要性も感じます。指導案を作る際には、現状の学び合いの様子や目指す学び合いの姿、個々の姿を明記することが大切であると思いました。本校の研究の中でも、指導案検討のなかで「学び合い」の視点も入れながら授業者の思いを聞き、授業を参観し、研究協議の中でも「具体的に目指した姿」に近づけたかを全体の視点と個々の視点で検証していけたらと思います。